

中国における古美術研究旅行

Ancient art research tour in China

佐藤直樹

SATO Naoki

Sato Laboratory has been engaged in international exchanges with Dalian Ethnic University Design College in China for many years. For example, we have realized graduation degree examination, practical guidance on graphic design, lectures, collaborative research with faculty and staff, holding exhibitions and so on. In the Sato Laboratory, we have planned "Ancient art research tour in China" as part of collaborative research with faculty members of the Dalian Ethnic University and have conducted it over the past three times. I will report about one research tour among them.

はじめに

愛知県立芸術大学（以下「愛知芸大」）佐藤直樹研究室は、長年にわたって中国遼寧省・大連民族大学設計学院との国際交流事業を行ってきた。卒業学位審査をはじめ、グラフィックデザインの実技指導や講演会、教員スタッフとの共同研究や展覧会開催など、その交流範囲は多岐にわたり、多くの実績を残している。

本稿は交流事業成果の一つである「大連民族大学設計学院古美術研究旅行」の企画と成果についての報告である。

経緯

大連民族大学は、中国遼寧省大連市に「大連民族学院」として1997年に創立され、2015年3月に現在の名称である「大連民族大学」に改称した総合大学である。設計学院は日本でいう「デザイン学部」に相当する組織であり、近年急速な発達を遂げている中国社会において、その研究成果に対する大きな需要が見込まれる成長分野である。

近年の中国における工業分野の発展を象徴するかのよう、設計学院発足当初においてはプロダクトデザイン研究室の活動が隆盛を極めていたが、2004年になってグラフィックデザイン研究室である「視覚伝達設計工作室」が組織化されたことに伴い、筆者も客座副教授（客員准教授に相当）

として学生指導の任にあたることとなった。

新しい組織である視覚伝達設計工作室のリーダーとして、愛知芸大を卒業、同大学院を修了した経歴のある周思昊（しゅう・しこう）氏が就任した。筆者は氏の学部在学中に愛知芸大教員として赴任して以来、氏の大学院修了後も朋友として親交を暖めてきた。そうした因縁から、新しい工作室（デザイン研究室）の運営協力を周氏から依頼された折に、一寸の躊躇もなく応諾したものである。

以来、周氏とさまざまな行動を伴にするなかで、「中国における古美術研究旅行」の実施企画が生まれた。

古美術研究旅行について

古美術研究旅行は、愛知芸大美術学部の開講科目として各専攻が実施する学外研究旅行である。芸術を学ぶ学生として、日本由来の美術の研究・調査・現地鑑賞を通じて新たな知見や教養、審美眼を深めることを目的としている。

周氏は愛知芸大在学中にデザイン専攻が実施した古美術研究旅行に参加しており、その際に深い感銘を受けたという。周氏と筆者のあいだの厚誼には「古美術への執着」という共通点も少なからず作用しており、周氏の古美術に対する並ならぬ情熱と造詣の深さについてはいつも一目置いていた間柄であったため、氏から「大連の視覚伝達設計工作室でも古美術研究旅行を開講したい」という相談を受けた際は、さもありませんと感じるとともに喜んで協力を申し出た。

中国における古美術分野が、世界でも有数の歴史と量、完成度を誇ることは言を俟たない。その中国において古美術研究旅行を実施できるとすれば、そこから得られる体験知もまた充実したものになることは疑いないように思われた。

周氏と筆者は互いの知的好奇心を刺激し合いながら、古美術研究旅行の目的地選定に着手することとなった。

中国における古美術研究旅行

こうして「中国における古美術研究旅行」は、平成24年（2012年）3月「福建省とその周辺地域の芸術歴史文化調査研究」を皮切りに、平成26年（2014年）12月安徽省とその周辺地域、平成28年（2016年）甘粛省とその周辺地域の芸術歴史文化調査研究として隔年で計3回実施された。

いずれの研究旅行も意義深く、思い出は尽きないが、本稿では第2回古美術研究旅行にあたる「安徽省とその周辺地域の芸術歴史文化調査研究」を対象として報告する。現在筆者は中国との国際交流事業の実績を評価され、科研費における拠点形成事業「現代に生きる手漉き紙と芸術表現の研究～サマルカンド紙の復興を中心に～」に共同研究者として名を連ねており、主として中国地域における紙文化の発祥と進展について研究を進めている。安徽省は手漉き紙の最高級品の一つである「宣紙」の発祥の地としてその名を知られる地域である。現在進行中の研究事業に深く関連する地域を、図らずも古美術研究旅行というかたちで先行して調査研究を行っていた奇縁を思い起こしながら本稿を進めることとする。

安徽省について

安徽省は中国の華東部に位置する内陸省である。海にこそ面していないが、西部には大別山脈、南西部には天目山脈が連なり、長江、淮河にそれぞれ南北を挟まれた豊かな地形に恵まれた土地である。この自然豊かな地域は、多くの歴史上の人物を輩出するなど 2000 年以上にも渡る輝かしい歴史と文化を誇る中国の芸術文化史上における要所でもあり、古美術研究旅行において調査の欠かせない地域として周氏と意見が合致した。

安徽省が誇る様々な文化の中でも、最も名高いものの一つとして挙げられるのは「宣紙」である。宣紙とは、

- ① 中国安徽省宣城地域（現在の「烏溪」周辺）で漉かれた紙
- ② ①の地域で定められた原料を用いて、伝統的手法に基づいて漉かれた紙

上記の①と②の条件を満たした紙だけが「宣紙」と名乗る資格を持つごく限定された手漉き紙である。

定められた原料とは青壇皮（せいだんぴ／楡科の落葉高木である青壇樹の樹皮）と稲藁（いねわら／安徽省の砂地で育てられた稲藁）のことを指し、加えて生産地の水で製造されるものだけが「宣紙」と呼ばれる。宣紙は強度がありきめ細かい性質があるため、滲みが美しく表現されるなど書き味が良く、また防虫性にも優れるため長期保存にも最適という、紙としては申し分のない利点をいくつかが併せ持っているため、古代から中国に継承されてきた書画の優品の殆ど全てに宣紙が使用されてきたとも言われる。

安徽省は宣紙の産地として、また古来の歴史文化の地として必然的に書画の優品も多く産出したため、グラフィックデザイナーであり文字の研究者である筆者にとっては垂涎の研究対象地となった。

安徽省を巡る古美術研究旅行

周氏をはじめとする大連民族学院（当時）設計学院・視覚伝達工作室教員 4 名および 2 年生学生 10 名からなる古美術研究旅行一行（以下「一行」）に筆者及び随行人として本学大学院生 1 名も加わり、安徽省を巡る「古美術巡礼の旅」が始まった。

安徽省内における旅程を以下に記す。

- 黟県 西遞（いけん・せいてい）
- 黟県 宏村（いけん・こうそん）
- 徽州 潜口（きしゅう・せんこう）
- 歙県 堂樾（きゅうけん・どうえつ）
- 歙県 唐模（きゅうけん・とうも）
- 涇県 查済（けいけん・ささい）
- 涇県 小嶺村（けいけん・しょうれいそん）

何れも中国国内における古鎮（古い街並みが遺った集落）として名高い地域である。こうした古鎮と呼ばれる古集落は中国各地に残存するが、安徽省は中でも「古鎮の宝庫」と称されるほど各所に点在する。中国は長い歴史を保有するなかで数多の芸術文化を生み出し蓄積してきたが、其れ故

に先代の文化遺産が後代に伸張した文化によって「上書き」される例も後を絶たない。近年における端的な例は「文化大革命」であろう。為政者による大規模な権力闘争のために、長きに渡って築いた貴重な芸術文化の破壊が齎されたという事例は枚挙に遑がないが、広大な中国の地ではその難を逃れて継承された文化もまた僅かながら存在する。安徽省はそうした希少な地の代表と言えるだろう。

「宏村」(写真1)は南宋の紹興元年(1131年)に建造された土地で、最盛期の明・清時代の旧建築物137棟が現存している。その一帯は同じく黟県に在る「西通」(写真2)とともに、2000年に世界文化遺産として登録されている。かつての繁栄を物語る白壁の住居が立ち並ぶ美しい佇まいから、宏村は「中国画里鄉村(水墨画のふるさと)」、西通は「桃花源里人家(桃源郷)」と称される。世界文化遺産登録までは、中国国内でもほとんど顧みられることがなかった地であったことが幸いし、500年来の建築と生活様式がそのままに保存されている稀有な土地である。

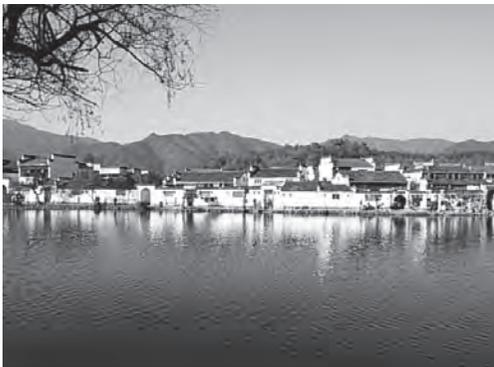


写真1 黟県 宏村



写真2 黟県 西通

一行は両村に滞在・宿泊し、明・清時代の遺構に数多く触れるとともに、当時の生活様式の遺薫を味わった。とはいえ、年若い学生たちの目にはそれらが古めかしい体をしたテーマパークのように映ったかもしれない。世界文化遺産に指定されてからというもの、両村は所謂観光地として保全・運営されていることも事実であり、この地を訪れる観光客との間に成立する経済活動に依存している面は否定できない。筆者は日中の古美術研究旅行体験を通して、両国におけるそうした必ずしも好ましからざる事例をいくつか目撃してきた。

古来の芸術文化や生活様式の保存と継承は、「いまを生きる」人々の暮らしの犠牲を前提とすることでは成立し得ないことは明らかである。「いまの暮らし」から享受できる利便性を放棄してまで古いものや生活様式を尊ぶことを優先するという態度は、多くの現代人にとって不合理な要求である。それでも古美術を尊びさらに未来へと伝承していこうとするのであれば、「古美術」と「いまを生きる暮らし」との整合が図られなければならない。

古美術を巡る研究・調査とは、単に懐古趣味・骨董愛玩という類いのものではなく、審美眼を通じて古代と現代の生活の間に存する断絶を繋ぎ、その知見を持ってして未来の暮らしをより心豊かなものにするよう図るために為されるものであろう。

続いて訪れた徽州および歙県もまた、黟県に劣らぬ（時代的にはそれ以上の）歴史と文化を誇る土地であるが、現在では鄙びた佇まいが広がる田園地帯である。

歙県にはかつて徽州府（安徽省の前身）の府城が置かれ、徽州文化の中心として栄えた。中国の伝統芸能として名高い「京劇」は、この地方に伝わる「徽劇」が北京に伝わったものと言われ、他にも新安画派・新安医学といった独自の芸術や学問を生み出し、また安徽料理は中国八大料理の一つに数えられるなど、文化の一大中心地であった形跡がうかがわれる由緒ある地域である。

歙県の名産として「歙硯（きゅうけん）」「徽墨（きぼく）」が挙げられ、これは所謂「文房四宝（ぶんぼうしほう・硯、墨、紙、筆の4種を指す）」のうち「硯」「墨」にあたるものである。「宣紙」をそこに加えると、文房（文人の書斎）に必需の用具とされた4種のうち実に3種が安徽省産出の品こそが最高峰とされていることとなる。安徽省が「文人」「文化」の揺籃の地であることはこのことから疑いが無い。

歙県の都市の一つである「唐模」（写真3）は、その名が示すように起源が唐代にまで遡る、安徽省にあって最も歴史のある古鎮のひとつである。唐模は教育・学芸が盛んな地であったため、古来多くの傑出した人物を輩出している。この地域の古い諺に「三代不讀書、恰好一欄猪」というものがある。「三代にわたって学問をしなければ、柵の中の豚と同じ」という意味であり、彼の地において学問が如何に重要視されたかを物語るものであろう。



写真3 歙県 唐模

その唐模にある壇干園（だんかんえん）という庭園に赴いた際、湖心亭（こしんてい）（写真4）という小さな東屋があった。小さな人工湖（小西湖）の浮島に造築されたその建物は、施錠され人が立ち寄る様子もなかったが、何か強く心惹かれるものを感じたため、周氏を通じて庭園管理人に特別拝観を依頼した。程なく管理人によって開錠された湖心亭の内陣（写真5）には、宋の四大家（そののしたいか・宋時代の四大書家）である「蘇軾（そしよく）（写真6-1）・黄庭堅（こうていけん）（写真6-2）・米芾（べいふつ）（写真6-3）」を含む、宋・元・明・清代の書家あわせて18名の真跡を刻した石碑が残されていた。

これらの石碑群はガラス一枚を隔てたのみのごく簡易な陳列状態であるにもかかわらず、保存状態が極めて良いため、目にした当初は石碑が精巧なレプリカ（複製品）であり、貴重な現物は博物

館に納まっているものと信じて疑わなかったほどである。管理人の言によると、これらの石碑群は古くから唐模の人々によって大切に保存・継承されてきたものであり、その芸術的・文化的価値を知るが故に長く対外には秘匿されてきたものであるという。



写真4 壇千園 湖心亭



写真5 湖心亭内陣

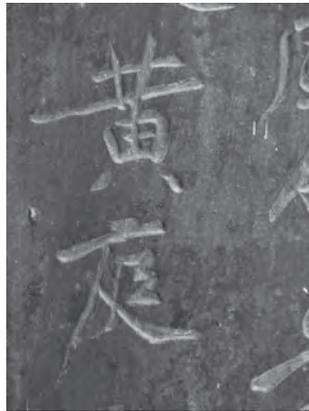


写真6 湖心亭 石碑(部分) 左から「蘇軾」(写真6-1)「黄庭堅」(写真6-2)「米芾」(写真6-3)の真蹟

先述した文化大革命の折には、これらの貴重な石碑群を鶏小屋内に隠蔽し、道路や橋脚などのインフラ整備のための建材として石板の提供を迫った紅衛兵らの厳しい追求を逃れた逸話があるという。そうした逸話を語る管理人の口振りや表情からは、古来より教育・学芸を重んじた好学の地の正統なる後継者としての気概がまざまざと見てとれ、筆者は深く胸を打たれた。芸術文化を愛し、継承するものとしての矜持を見せつけられたようなこのエピソードは、筆者にとって今回の古美術研究旅行における最大の収穫であったかもしれない。

今回の旅程の最後に一行が向かった涇県では、小嶺村の宣紙製作工房(写真7)に立ち寄り、その製作過程や宣紙の元となる原材料(写真8)、道具(写真9)等を見学・調査することができた。手工業からなる「工房」と呼ぶに相応しい小所帯の工場であったが、其れ故に一連の「紙が出来上がるまでの工程」を通覧することができた貴重な機会となった。

工房では紙を漉くための「漉き簀(すきす)(写真10)」を編むことからはじめ、青壇皮の加工、

紙漉き、乾燥、裁断までを一手にこなし、紙としての品質を1000年以上も保つという宣紙を細々と、しかし営々と生産していた。その工房の営みには「世界最高品質の紙」と称される宣紙を世に送り出す誇りと信念が満ち溢れていた。



写真7 小嶺村 宣紙製作工房



写真8 宣紙のもととなる原材料



写真9 樹皮を粉碎する機器



写真10 漉き簀を編む作業

この工房における取材は、先述したように結果として現在筆者が取り組んでいる科研費・拠点形成事業「現代に生きる手漉き紙と芸術表現の研究～サマルカンド紙の復興を中心に～」における先行調査に繋がることとなった。黔県や歙県と比較したとき、涇県は必ずしも「観光地」としての側面は持ち合わせておらず、素朴で勤勉な市井の人々の暮らしが綿々と営まれてきた風情を色濃く残している。そうした地を訪れ工房を取材することができたのも、古美術研究旅行という名目があればこそであり、観光旅行では決して得ることができない体験があることを強調したい。

取材の成果から推測できることは、「紙となる原材料」「漉き簀の構造」「紙漉きの工程」「裁断寸法」などに、それぞれの紙（宣紙、和紙、サマルカンド紙）独自の規格や設定、手法等が存在するため、それらの詳細な比較検討と評価が今後の課題になってくるであろうということである。今回の古美術研究旅行で得られた知見を今後の研究に資する材料とするため、あらためて取材内容を精査中であることを付記しておく。

おわりに

今回の古美術研究旅行を通じて「温故知新」という言をあらためて思い起こしたことであった。古美術を巡るという行為には、脈々と継承されてきた「人間の営み」への慈しみと信頼、敬意といった肯定的な感情が根底にあり、それはそのまま現在や未来の営為の肯定に繋がるものである。「美」を生み出し、寿ぎ、継承していくという人間であるからこそ成し得る大きな円環に、いまを生きる我々もまた組み込まれていることを知るということ、それが古美術研究旅行の最大の意義であることを述べて拙稿を閉じることとする。